

放流資源共同管理型栽培漁業推進調査（要約）

増養殖対策科 児 玉 修

本調査は、瀬戸内海関係海域において生息域が複数県にまたがる回遊性種の栽培漁業を効率的に推進するために、重要な栽培漁業の対象種であるクルマエビの回遊実態や利用実態を関係県が共同して調査を行い統一的な資源の管理方策等を策定しようとするものである。本県ではクルマエビ類を漁獲対象としている中土佐海域の小型底曳網漁業の漁業実態や漁獲統計等を調査している。

詳細については、既報「平成11年度放流資源共同管理型栽培漁業推進調査報告書」で報告しているので、ここでは要約を報告する。

要 約

I 資源利用実態把握調査

1. 漁獲量・漁獲尾数

’97～’99年の漁獲量・尾数を比較すると、漁獲量の年変動は大きく、’98年には前年の1/3程度に漁獲量が減少し、’99年には前年の約5倍程度に増加している。’99年は好漁年となり、漁獲量で約2.4t、漁獲尾数で約53千尾に達した。月間漁獲量及び漁獲尾数の最高は何れも’99年6月の851kg及び約19.2千尾であった。次に多かったのは’97年11月の509kg及び9.2千尾であった。

2. 漁獲金額・平均単価

’97～’99年の漁獲金額・単価を比較すると、漁獲量の年変動が大きかったため、’98年には前年の1/2程度に漁獲金額が減少し、’99年には前年の3.5倍程度に増加した。’99年は約1千万円の漁獲金額となり、小型底曳網漁業全体の漁獲金額の約11%に達した。また、年平均単価は’97年と’99年が約4.0千円/kg、’98年は少漁のため単価アップして約5.1千円/kgであった。月間漁獲金額の最高は’99年6月の約3,182千円、次に多かったのは’97年11月の約1,814

千円であった。また、月平均単価は約3～6千円の幅で推移し、漁獲量の多寡とは別に、概ね11月に低下して12月に上昇する傾向がみられた。

3. 体重組成

’97～’99年の体重組成を比較すると、’97年の漁獲サイズは、4～5月に60～90g、6～10月に50g前後、11～12月に60～70gであったのに対し、’98年と’99年は似た傾向を示しており、5月の初漁期と10月或いは11月の年2回サイズダウンする傾向がみられ、6月から9月或いは10月にかけては除々にサイズアップする傾向がみられた。

4. 漁獲水深と体重の関係

クルマエビは水深25～45m漁場での漁獲が多く、漁場水深が深くなるほど漁獲されるクルマエビの体重は大きくなる傾向がみられた。

5. 漁獲努力量

’97～’99年の小型底曳網漁業の出漁隻数を比較すると、’97年は5月最多で11月最少となり、12月に再び増加した。’98年と’99年は同様の傾向で、6月に最多で9月に最少となり12月に再び増加した。

6. C P U E

’97～’99年のC P U Eの推移を見ると、’96年・’97年と比較して’99年の資源水準が格段に高かったことが推察された。また、月別の推移では、’97年と’98年はそれぞれ8月と7月にピークが見られたのに対し、’99年はより早期の6月にピークが見られた。この傾向差は’99年の資源水準の高さと関連しているかもしれない。また、’82年～’99年のC P U Eの経年変化から、クルマエビの資源変動には、ほぼ10年周期の周期性がある可能性が示唆された。

Ⅱ その他の調査

1. クルマエビの放流状況と放流効果の推定

本県の土佐湾中央海域におけるクルマエビの放流は、浦戸湾、浦の内湾・宇佐地区、須崎湾・野見湾、手結地区で行われてきたが、'95年以降はほとんどが浦戸湾で放流されている。放流量は'88年の約8百万尾をピークとして減少傾向にあり、'93年以降300万尾以下の放流尾数で推移している。しかし、'96年と99年には浦戸湾内にある中間育成場でP A Vが発生するなど新たな問題も生じてきたため、'98年と'99年と放流量は低水準で推移している。また、'82年～'99年についてクルマエビの放流尾数とC P U Eの相関を求めたが有意の結果を得なかった。

2. 資源加入状況調査

底曳網漁場のすぐ岡側に位置する浦戸湾口浅海域で漁獲されるクルマエビは、当年発生群と思われる20 g程度の小型個体が多く、特に7月から9月にかけては10 g以下（最小は1.42 g）の小型個体が多く漁獲されている。また、昨年度の浦戸湾奥部における稚エビの採捕調査結果から、1 g以下の稚エビが6月下旬から11月中旬まで長期にわたり採捕されていることを考え合わせると、クルマエビは、浦戸湾をナーサリーとして、長期間にわたり成長とともに湾内から沖の漁場に移動して小型底曳網漁場の資源に加入していることが推察された。